
いつか中世ファンタジーを書くために

Mick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつか中世ファンタジーを書くために

【Nコード】

N8612Q

【作者名】

M i c k

【あらすじ】

とにかく、中世ファンタジーを書く上で役に立ちそうな情報をとにかく詰め込んでいこうと思います。

『こんなことも知らんのか、仕方ない、補足してやろう』とか言つて貰えたら、泣いて喜んで見せます。

五大元素

中世ファンタジーといえば魔法！ というわけでまずは魔法から。その中でも良く出てくる設定の中に、四代元素とか、五代元素とかがありますよね。

ほら、アレです。

『魔法の属性には、火、水、土、風、エーテル（魔素でも可）、が有りまして……』

という感じに第二話とかでヒロインが説明してくるアレです。こいつの歴史について紹介していきたいと思います。

昔は、「物を分割していくと、それ以上分けられない原子というものに辿りつく」という考え方は、かなりマイナーでした。

ほとんどの人々は、ドレッシングが水と油に分離するみたいに、均質な物質に辿りつくと考えていましたし、いわゆる『真空』を完全に否定していましたから、原子と原子のあいだにスキマがある原子論はナンセンスな理論でした。

そんななか、昔の偉い哲学者さんのタレスという人が、世界は何から出来ているんだろうかとうんうん唸って考えた結果、

「そうだ！ 世界中どこにでもある水が元素であるに違いない！」
という結論に達しました。

その他にも、「世界中に満ちている空気だ」とか「火だろ馬鹿」とか「土だよ阿呆」とかみんな好き勝手言いました。

ここまですで四代元素です。

ちなみに、『火が水に強い』みたいな考え方はありません。それは『元素は、木・火・土・金・水である』とした陰陽道の考え方です。五芒星で有名なアレです。

閑話休題。

そして遂に、「じゃあ、俺の考えたエーテルも足して、全部が元

素ってことでいいじゃん」と言いだすアリストテレスが現れて、五代元素の考え方が出来上がったという訳です。

エーテルと言うのは、惑星やら星やらが光っているのは、なにかとても神々しい物質に満ちているからに違いないと閃いたアリストテレスが考えた『永遠に輝き続ける』物質です。

ちなみにこのエーテル、19世紀の物理学で『光を伝える物質』として再登場します。

……こうやって整理してみると、かなり混ざってたと言うか、良いとこ取りというか、いろいろな哲学思想がごちゃ混ぜになっていたんですね。

それでは。

魔法と教会

最近のなろうの小説を読む限り、教会と魔法の関係の説明はあまり需要は無さそうなんですが、だからこそ、新鮮味のあるモノが書けそうなので書き貯めていきたいと思います。

某ドラゴンなんかでは、教会はいわゆる病院で、魔法使いともなんら確執なく平穏な日々を送っていますし、白魔導士と僧侶は似たり寄ったりですが、現実にはなかなかにどす黒い歴史があります。その原因やら実際の過程やは、今現在もよく分かっているとは言えませんが、自分の独断と偏見で挙げていこうと思います。

まず、信じる神が違います。

なので、教会は魔法を認めるわけにはいきませんでした。その代わり、魔法に関する神様が出てくる神話を一部変更して伝えたりしました。

『じつはこの神様は神じゃなくて、天使の仮の姿なんだ』とか『こいつ実は悪魔なんだ』とか『教徒の信仰を試す為に神が流したデマ』とかやりたい放題です。

迫害も酷かったようです。現代風に言くと、少数派のホームレスが中学生に意味も無く迫害されるようなものでしょうか。

数の勝利ですね。一人から聞いただけでは『嘘かも知れない』でも、十人以上から聞いたなら『たぶん真実に違いない』ってなるのが人間ですから。

次に、教会の教えを補完するというのもあります。

『なぜこんなにも熱心に信仰を捧げ、寄付もしているのに、神は救ってくれないのか』

この当たり前な問いに対する答えが、悪魔であり、魔法使いです。要するに、『奴らが邪魔をするからだ』ということにしたんです。そうになったら今度は、『じゃあ、そいつらをどうにかしなきゃ』ということになりますから、教会にとっては一石二鳥ですね。

さらに、そもそも人は、偶然でしかない不幸に見舞われると、誰かや何かのせいにしたがるものですし、自分の知らない方法で良い結果を出した人を見ると、『何かズルしてるんじゃないか』とか『自分とは何かが違うんじゃないか（才能、脳みそ、生みの親……）』とまず考えるものです。

それ自体は悪いものではないのですが、嫌な方向に進むと迫害に容易に結びつきます。

例えば、『薬草についての知識が深い老婆』は『悪魔と契約した魔女』になりますし、『当時よく知られていなかったブルーチーズが好きな村人』は『チーズを腐らせる化け物』になりますし、『偶然トラブルが起こる前に来た旅人』は『厄災をもたらした悪魔の化身』とされて道路に埋められたりします。

とまあ、理由はいろいろあるのですが、教会と魔法使いが共存する物語を書く時は、まずここら辺をどうにかしていききたいところですね。

あ、ちなみに、僧侶に回復魔法を使わせる方法なら簡単です。『神の奇跡』でオールオツケです。教会が信じる唯一神の奇跡でさえあれば良いんです。キリストもやりまくってますし。

でも、司祭とか騎士にミヨルニルやグングニルを持たせるのは不味いです（あくまでもその武器の歴史的にですが）、エクスカリバーはグレイゾーン。

宗教（前書き）

今回は、自分の主義主張を再確認するために書いたので、設定と
いうより随筆みたいになっちゃってます。

無理矢理カテゴライズするなら、キャラ設定でしょうね。

宗教

今回は、いつか信仰心の厚いキャラを書く時に役に立ちそうなことをちらほらと書き貯めて書いていこうと思います。

さて、ある日本人がクリスマスのニューヨークでタクシーに乗った時、話の流れで『神を信じないなら、いったいどうやって秩序を保っているんだ？（うる覚えです）』と聞かれたそうです。

法律があるじゃないか、と大多数の人は思うでしょう。そこが日本の特徴でして、法律上の『違法かどうか』と道徳上の『善か悪か』をけっこう深い程度まで一緒に考えているんです。

例としては、『』は、法律的にはセーフですか？』という質問がネット上に大量に有ることとか、『捕まらなければ良いんだよ』とか、政治家の『裁判で無罪を勝ち取って、潔白だと証明する』という発言とかですかねえ（異論は認めます）。

実際のところは、法律的にセーフでも社会的には死亡でしょうし、捕まらなくとも誰かに迷惑をかけたのは確実ですし、証拠不十分で無罪になった政治家が潔白だなんてとても思えませんよね。

その、『多くの人に共通する法律とは異なる善悪の基準』が宗教の一つの側面だということです。

大昔の偉い人達が、仏教の教えを受けようと命がけで中国に渡ったり、寺をあちこちに建立した理由の一つに、当時の世界最高峰の哲学でもある仏教によって、国民の心にいわゆる道德観を芽生えさせて国を安定させようというのが有ったそうです。

余談ですが、ブッダは自分を神だとは一言も言っていません。

後世の人々が、『彼は神に違いない』と勝手に解釈しただけです。仏像になってる神様達は、異世界のブッダです。なんと一中二病、本当にありがとうござ（ry

閑話休題。

とはいえ、宗教はただの道德というわけではないので、もう少し掘り下げていこうと思います。

世界はどうやって『始まった』のか、なぜ地震が起こるのか、どうやって雷が落ちてくるのか、雨は、雪は、風は……

昔の人々は知らないことがとても多かった。

ただ、『人間など遠く及ばない大きな力』が働いているのは理解できた。

それは、どうしたら鎮められるのか、少しでもその存在に近づくことはできないのか、必死で考えた結果が、神話であり、宗教です。そんな簡単に信じるのか？　と思う人がいるでしょうが、同じ状況なら自分は信じたと思います。

なぜなら、実望遠鏡で冥王星を見たことが無い自分が、冥王星の存在を確信しているからです。専門家も、テレビも、周りの人も、『冥王星は有る』と言うから、自分は冥王星が有ると信じています。

そしてもう一つ、宗教を生み出す大きな理由があります。

人は死んだらどうなるか、という問いに答えることです。

漫画とかだと、『ああ、ずっと自分の心の中にいたんだ』とか『肉体が滅んでも魂は不滅だ』とか『転生を待っている』とかいろいろあります。自分はなんとなく二番目を信じたいです。それに、いくら綺麗で安くても、自殺者がでた部屋に住みたくはありませんし、夜の墓地は怖いです。

『宗教』なんていうガチガチな感じではなくとも、なんとなく信じてるものは誰にでも有るんじゃないかってことです。

誰かが死んだら、科学的に意味は無くとも弔うのが人間ですし、切羽詰まった時にお守りを買って幾分かは安心できるのも人間です。クジを選ぶ時や、試合の応援をする時に、思わず心の中で祈ってしまったことも有ると思います。

それらの手順や様式をがっちりと整えれば、立派な宗教の出来上

がりです（慣習とも言つ）。

確かに非合理的ですが、精神的な安心を得ることができる。これが宗教のとても良いところですよ。

要するに、『神なんて存在がいるかどうか』よりも『それで平穏な心を得ることができるか』が重要なんです。

ところで、当たり前ですが科学は絶対ではありません。

調べればたくさん出てきますが、科学ではどうしても説明のつかないことは大量にありますし、昨日までほとんどの人が信じてきた理論が間違ってたなんてこともざらです。

そもそも、マイナスイオン製品が飛ぶように売れたり、ゲルマニウムのブレスレットが高値で売れたりしてる時点で、『科学的な思考』が出来る人は実はかなり少ないですね。

要は、『好きな方を信じれば良い』ってことです。

……なんかとてつもなく胡散臭くなってしまった（泣

騎士

魔法、教会、ときたらやっぱり騎士ですよ（なるう的な意味で）。

・騎士の成り立ち？　みたいなもの。

中世以前は、騎兵（まだ騎士ではない）は戦場の主役ではありませんでした（強いけど）。

まず、歩兵と比べて数が少ないことが一つの原因として挙げられます。

なぜなら、戦場で役に立つレベルの動きをできるようになるには、子供のころから馬術の特訓ができるようなブルジョアでなくてはならないからです。この時点で農民とか奴隷には到底無理です。

しかし、なによりも大きな原因は馬具が未発達だったせいで歩兵と比べて攻撃力が足りなかったことです。

そのため、戦場の主役は当時の最強兵科である重装歩兵であり、騎兵の主な役割は偵察やら追撃などの機動力を必要とするものでした。

例外は、馬上で弓が射れるほどの技術を有していたり、数が圧倒的であったりした遊牧民族や牧畜の民ぐらいなものです（こいつらはもうチート）。

しかし、あぶみ鎧が発明されると話が変わりました。

馬上で踏ん張れるようになったんです。

え、そんなに凄くなくね？　という感じを受けるでしょうが、これはもう革命的なことなんです。

槍を構えて突撃が出来るようになったうえに、武器を振り回すときにバランスがとれるようになったんです。

そうなればもう騎兵は圧倒的です。数が少ないという欠点を補っ

て余りある強さがあるからです。特にヨーロッパでは、ガチガチの全身鎧を自分にも馬にも着せて、モンハンみたいな槍ランスを構えて突進する重装騎兵が活躍します。

簡潔に言えば、突っ込んでくる自動車に勝てる一般人がいるか？
ってことです。

まあ、長弓兵には弱かったようですが、長弓兵には凄まじい筋力が求められることや教育の大変さから数が少ないです。

ここから騎兵の黄金時代が始まります。

そうして、政治的な地位が向上し、やがて騎士と呼ばれるようになるのです。

つまり、騎士という名称の意味とは、歩兵や騎兵という「分類」ではなく、「社会的地位」だということです。

・どうしても黄金時代の騎士に勝ちたいなら

その一、弓で射る。

その二、なんとか勢いを止めて（この時点で無理ゲー）、さらに馬から引き摺り下ろして（もはや奇跡）、鈍器でぶん殴る。

その三、なんとか馬から（以下略

その四、なんとか馬から（以下略

……勝てねえ。

・一騎打ち

騎士はその社会的地位の高さから、司令官としての役割も兼ねていました。

つまり、そいつさえ倒してしまえば後に残るのは、戦況もわから

ず、どっちにむかって進めばいいかも分からない烏合の衆というわけです。

そして、当時の戦争は儀礼的な意味合いが強く、弓などの投射武器は卑怯だといわれていたこともあり（身代金もとれないし）、騎士同士の一騎打ちが戦場の勝敗を左右していました。

しかし、戦争がだんだんと「相手を殲滅する」ためのものになっていくと姿を消していきました。

・騎士団つてなにさ

騎士団には、二つの種類があります。

一つは、修道士達が聖戦（十字軍の戦いとか）の為に作った戦闘集団としての騎士団。

もう一つは、騎士の軍事的価値が消滅した後に、偉い人たちが勲章のような意味合いで作った名誉職としての騎士団。

前者は騎士修道会といって、もう浪漫の塊のような奴らです。たとえ周りの味方が全滅しても、キリスト教の為に最後まで諦めないというまさに戦闘集団。

後者はぶっちゃけ戦闘はしません。一言でいうと、名誉職みたいなもんです。

サッカーの日本代表をサムライジャパンと言うようなものです。

・騎士の没落

騎士が没落した理由はいくつか有りますが、大きな理由を三つほど挙げます。

まず、戦術の発達です。

歩兵がどうしても騎士に勝てない理由の一つに、リーチの差がありました。馬に乗っているのに剣が届かないですし、槍だって、対

歩兵戦を考えるとあまり長くできません（懐に入られたら対応できないため）。せいぜい三メートルというところですが、騎士がそれより長い槍つまりランスを持てば良い話です。

が、天才かバカが五メートル以上の槍を発明しました。いわゆるパイク（長柄とも言う）です。

もちろん、そのままでは歩兵に勝てないので意味がありません。そこで、天才はある戦術を考えつきました。それが槍衾やりぶすまです。

早い話が、密集してハリネズミみたいになります。こうなるともう懐に飛び込むのは不可能なうえに、アウトレンジからの一方的な攻撃が可能です。

つまり、一対一では役立たずでも、集団で使った時の威力は凄まじいの一言だということです。

歩兵に対してはパイクを上から叩き付け（刃とか付けるとさらに凶悪）、騎士に対しては、腰だめに構え膝で固定して迎撃するわけです。

こいつのせいで騎士は戦場の主役ではなくなりました。しかし、こいつはまだ致命的ではありませんでした。

機動力が最低（移動するときはパイクを引きずらねばならないほど）なので弓で射殺してもらったとか、こちらもパイク兵を用意してどつきあいさせるとか対処法はありましたし、高い機動力と突破力は奇襲、遊撃、挟み撃ちなど活躍の場はまだありましたからね。

致命的なのは、傭兵に仕事を奪われてしまったことです。

戦乱が長く続いた結果として何度も戦わなければならなくなつたので、傭兵は維持費が全くかからないという点でとても重宝され、いざ戦いとなつても防具や武器の調達に莫大な費用の掛る騎士は、その栄光が陰りだしました。

とどめは、フェーデの全面禁止です。

傭兵のせいで職にあふれた騎士の末路は、傭兵となるか、フェーデという所謂「決闘を認める法律」（本来は親の仇とかを討つ為の

法律）を悪用した恐喝になっていくのですが、案の定禁止されています。

そうして、騎士は元の騎兵へと没落していったわけです。

・じゃあ、騎士つてもういないの？

じつは、います。

名誉職としてなら、まだ生き残っています。

そいつらの祖先は、戦が起こってもお金を出すだけにして、なんとか騎士の称号だけは守り抜きました、いわゆるナイト爵（貴族）。あと、前述の名誉職としての騎士団の騎士団員もいます。

・騎兵（騎士ではない）が戦場から消え去ったのはいつ？

これはちよつと中世じゃ無くなるんですが、中世ファンタジー書く上で参考になりそうですし、書いておきます。

ぶっちゃけ、戦車の発明です。

意外でしょうが、銃は何かあったんです。銃を装備した騎兵は、なかなか重宝しました。それに、パイクの後継である銃剣はリーチが短いですね。

しかし、戦車がでてくるともう、ね。

結果、第二次世界大戦の後に騎兵はいらない子になりました。

・騎士になるには。

まず、7歳ぐらいで、かた騎士と主従関係を結んで小姓ペイジとなり、主君の使い走りしながら初歩的な技術を学びます。

次に、14歳ぐらいで従騎士エクスワイアになり、身の回りの世話や武器の持ち運びや修理をしつつ、戦場でも戦うようになります。

そして、20歳ぐらいで主君に一人前と認められると、就任を受

けて一人前の騎士になれて、金もしくは金メツキの拍車をつけることが許されます。

ちなみに就任の儀式とは、主君の前に跪いて頭を垂れる騎士の肩を主君が長剣の平で叩くというものです。

狼に限りなく近いなにか（前書き）

まだ、名前すら決まっていけません。
ああ、グダグダ。素晴らしきグダグダ。

狼に限りなく近いなにか

体胴長（横の長さ） 160cmくらい。

体高（縦の長さ） 90cmくらい。

体重 50kgくらい。

20 30頭の群れを形成しており、雌雄別で順位がある。

繁殖が出来るのは最上位の雄と雌のペアのみ。

群れごとに縄張りを持っており、その広さは100 1000平方km。

縄張りの外から来た狼が混じることもあるが、たいてい追い払われる。

妊娠期間は二か月くらいで、4 6頭の子供を産む。

雌が巣穴を作り、そこで子育てを行う。父親や群れの仲間も子育てを手伝う。

生後二週間ほどで目が開き、三週間で歩けるようになる。

ここらへんから「群れ」という社会を認識していく。

二か月ほどで乳離れをし、以後は親が吐き戻して与える固形食を食べる。それと巣穴を出てウロウロしだす。

一年で大人と同じ大きさになるが、繁殖できるようになるのは二歳から。

成熟した狼は群れに残るか、群れを出て（いわゆる一匹狼）配偶者を見つけて、新たな群れを形成する。

肉食で、シカ・イノシシ・ヤギなどの有蹄類やネズミ・リスなどのげっ歯類を狩る。

餌が少ないと、人間の生活圏で家畜や残飯を食べたりもする。

シカなどの大きな獲物を狩るときは群れで行動し、長時間の追跡

を行う。

獲物の群れの弱い個体を襲うことが多い。（病気・怪我・高齢・子供など）

最高速度の時速70kmなら20分間、時速30km前後まで速度を落とせば一晩中獲物を追いまわせる。

捕えた獲物は上位の個体から食べる事ができる。

成功率は10%以下といったところなので、何日も餌が無いことが多く、一度に大量の肉を食べることが出来る。

肉は筋張っていて繊維質（硬いチーズ鱈みたいなかんじ）で、独特の臭さがある。

牙はアクセサリとして加工されたり、即席のナイフや矢じりにもなる。

毛皮は薄くて通気性が良いが、手触りはザラザラとしていて艶も良くないので他の毛皮と比べると人気は低い。

しかし、一部の愛好者者以外にも、実用性重視の庶民の普段着や鎧としても使われるので、流通量は比較的多い。

鹿に限りなく近いなにか

体胴長（横の長さ）	300cmくらい。
肩高（縦の長さ）	230cmくらい。
体重	800kgくらい。
寿命	13歳くらい。

雌は一回りほど小さい。

雄は単独または少数で、雌と子供は群れを形成する。秋の繁殖期のみ雄はハーレムをつくる。

雄のみ角が生えており、毎年春に生え換わる。角の分岐している数で大体の年齢がわかる。

生まれたばかりの子供（約15kg）の体にはクリーム色の斑点がある。生後1〜2か月で消える。

草食で、木の葉や樹皮・地面に落ちた木の実・海草などを食べる。

繁殖期になると、雄は首から独特の匂いを発するようになり、お互いに横に並んで歩きながら鳴き声を張り上げて競り合う。それで決着が付かなかった場合、角でお互いを突き合う。（敗者は最悪致命傷を負う）勝者がハーレムを作る。

出産は5〜6月くらいに捕食者に見つかからないよう森の中で行われ、数日後に雌と子供は群れに戻り、大人が餌を探している間の子守りをしたりしてもらったりしながら子育てをする。

7月ぐらいには乳離れをして草を食べるようになり、雄の場合、来年の夏くらいには独立する。

ただし、繁殖期の行事（？）に参加するのは、雌は3歳から、雄は5歳から11歳まで。

なめした皮は薄く柔らかく、手袋や靴、ベルト、ソファーなどに最適である。

角はとても堅いが、水につけると柔らかくなり簡単に加工することができ、矢じりや釣り針、ナイフの柄やボタンなどに利用される。粉末にしたものは薬としても扱われ、強壮・造血などの効果がある。

唾液は、植物の成長を促す。

肉は血のように赤く、淡白で癖が無く、様々な料理に仕える。低脂肪・高タンパク・高鉄分。悪く言えば脂がのっていないので物足りない上にかたい、そして臭い。感染病の危険もあるので生食は厳禁。

兎に限りなく近いなにか

体長（横の長さ）	40cmくらい
体重	2kgくらい
寿命	5～11歳

地中に複雑な巣穴を掘って集団で生活する。危険を感じると巣穴に逃げる。

強い縄張り意識を持ち、匂いを放つ下顎をあちこちに擦り付けて縄張りを主張する。

草食で、草や樹皮、木の枝、果物などを食べる。

時速60kmほどで逃げるができる。

繁殖期は春先から秋の終わりくらいまでで、多産である。

1ヶ月ほどの妊娠期間で5～6頭ほどの子供を産む。

肉は淡白な味で柔らかいが、独特の獣臭がある。一人前のために数頭分が必要な、おいしい部分がある。

毛皮は、柔らかくてふわふわな毛で覆われていて、染色が容易。耐久性が低い。

唾液には殺菌成分がある。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8612q/>

いつか中世ファンタジーを書くために

2012年1月10日21時51分発行